様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ６ 月 １２ 日現在

機関番号：１２６１１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2015～2019
課題番号：１５Ｋ０２２１４

研究課題名（和文）『和漢朗詠集』諸本の集成と研究

研究課題名（英文）A compilation and study of the various versions of the Wakan Roei Shu

研究代表者
山本　まり子（YAMAMOTO, Mariko）

お茶の水女子大学・文教育学部・非常勤講師

研究者番号：８０３８５９７１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,400,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究は平安時代の書写とされる『和漢朗詠集』諸伝本について、書写内容、及び書の面から改めて検討を行い、その実態を明らかにし、それらの分類と系統立てを試みたものである。その研究成果を踏まえ、本研究の一環である『和漢朗詠集』諸伝本の収集・集成を行い、また、より活用し易い形での情報開示の在り方について提言した。それに加え、取り上げた各伝本の書写内容の全てを検索し得る「語句検索システム」を構築した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　現存する『和漢朗詠集』諸伝本の中には、原本が書かれてからわずか数十年後に書写されたと推測されているものもあり、いずれも原本を探る上で貴重な資料である。また能書家の手によるものが含まれていることから、文学のみならず、書を研究する上でもその学術的価値は高い。
　本研究成果は文学・書の領域の研究の活性化を促すものであり、『和漢朗詠集』の研究にとどまらず、他作品の研究に資すると考える。

研究成果の概要（英文）：This study was based on the classification and systematic arrangement of various Heian-period versions of the“Wakan Roei shu”through the examination of the contents and the styles of calligraphy.
Based on the results, as part of this study, each version was complied and led to the recommendation of new approach to sharing information found in the study.
Additionally, a word search system engine was created that allows users to search all contents of the compiled versions of the“Wakan Roei Shu”.

研究分野：日本文学・書道

キーワード：和漢朗詠集　藤原公任　粘葉本和漢朗詠集　世尊寺家　伝本　写本　校本　データベース

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

『和漢朗詠集』の伝本が翻字されている書籍のうち、代表的なものとして次の二つを挙げることが出来る。①伊藤壽一・鹿嶋（堀部）正二編『伝藤原定頼筆和漢朗詠集山城切解説及釈文』、②『新編国歌大観』である。しかしながら今日の研究者が基礎資料として活用、引用するこれらの書籍はそれぞれ課題を抱えていると言わざるを得ない。

前記①は『和漢朗詠集』諸伝本の集成がなされた唯一の書籍であるが、そこに所収されていない資料があり、誤謬、及び不明確な説明が存する。該書は「山城切の紹介解説と釈文」のために執筆されたものであることから校本として再検討を要する。

前記②にも当該作品の翻字内容について再検討されるべき箇所が存する。

一方、古筆切については小松茂美著『古筆学大成』所収の資料が有効であるが、中には『古筆学大成』に所収されていない資料もある。収集、集成した伝本を選定し、資料提供を行うことは古典の基礎研究に必須であるところ、『和漢朗詠集』については研究の基盤を成す本文の整備が十分に行われていない現状にある。

諸伝本の特性・特質を見極める上で、書写者・書写年代に関する情報は極めて有用である。伝本からそれらの情報を高い精度で得るために、本文研究のみならず書の研究は不可欠である。平安時代の書写とされる『和漢朗詠集』諸伝本には能書の手による書も存し、書としての学術的価値も高い。しかし従来、書は感覚的に論じられる傾向にあり、当該作品の書写者・書写年代について未だ定説のないものがいくつか存する。

２．研究の目的

⑴『和漢朗詠集』に関するより多くの資料を収集し、選定を行い、『和漢朗詠集』諸伝本の本文集成を行う。

⑵『和漢朗詠集』各伝本の実態調査を行い、各伝本の関連性を見出し、その系統立てを試みる。

⑶先学の研究成果に存する誤謬・謬説かと思われる箇所、不明確な説明を見直し、その課題を解決しつつ新たに翻字した資料を作成する。それらを研究上、活用し易い形にした上で各伝本の情報を開示する。

３．研究の方法

⑴収集、集成し得た『和漢朗詠集』諸伝本の書写内容（詩歌句の有無・配列、個々の本文等）について異同調査を行い、その一覧、及び校本を作成した。それをもとにデータベースシステムを使用し、伝本の関係について定量的な分析を試みた。

⑵『和漢朗詠集』諸伝本を翻字し、それをデータベース化し、「『和漢朗詠集』語句検索システム」を構築した。網羅的に文字の抽出を行いたく、当該システムを本研究のために活用した。

⑶文字、及び書に関する調査では、伝本（実物）を実見することに努めたが、その一方、デジタルデータ化した図版を使用し、以下の手法を取り入れた。書写者により削消・補訂された文字の痕跡を見出すべく、個々の当該文字を拡大した。また、作品の比較検討を行う際、それぞれサイズの異なる作品の縦の長さを揃えた。さらに、茨城県警科学捜査研究所とアプリケーションソフトウェアの共同開発を行った。粘葉本と伊予切の書のごとく酷似している作品については、当該ソフトウェアを活用し、両本の文字間の距離を計測し、定量的な分析を試みた。

４．研究成果

『和漢朗詠集』は朗詠にふさわしい中国・日本の詩文、和歌等が載録された平安時代の作品である。撰者とされる藤原公任（966－1041）の撰による『和漢朗詠集』が当時を代表する作品の一つであることに疑いの余地はなく、これを研究することは我が国の文化の基盤を理解する上でも極めて重要である。しかしながらその原本は現存しない。『和漢朗詠集』の姿を窺い知るにはその伝本に頼らざるを得ない。

現存する平安時代の書写とされる『和漢朗詠集』の伝本の数はいわゆる完本・古筆切等をあわせると三十余種に上る。本研究の一環として多数の資料を収集し、集成を行った。その結果、後述する堀部正二・久曽神昇両氏の所論に扱われなかったいくつかの新たな知見を得ることができた。本研究は従来の知見に新たな知見を加え、平安時代の書写とされる諸伝本に関する先学の研究について形態・本文、及び書の面から改めて検討を行い、諸伝本の実態の解明及びそれらの分類を試みたものである。以下概説する。

堀部氏は主に本文の関係性に注目して平安時代の書写とされる諸伝本を次のごとく分類した。

⑴御物伝行成筆粘葉装本の系統に近きもの……粘葉本・近衛本・法輪寺切・伊予切

⑵関戸家蔵伝行成筆本（源兼行筆）の系統に近きもの……雲紙本・関戸本・巻子本・葦手本

⑶いづれとも判定つかず夫々に特異の本文を有して雑類とも称すべきもの

一方、久曽神氏は主に形態的な面から次のごとく大別した。

甲類……雲紙本・関戸本・巻子本・葦手本（雲紙本・関戸本の一類と巻子本・葦手本の一類に分類）

乙類……粘葉本・近衛本・法輪寺切・伊予切

その上で久曽神氏は「少なくとも初稿本・再稿本・精撰本の三種が存するようである。その成立過程は、更に今後研究すべき問題であるが、著者公任の手許に存した原本に、次第に追補せら

れた結果ではあるまいか」、「この三類の伝本の成立について考えるに、やはり公任の手になったものであろう」とし、甲類の雲紙本・関戸本を「初稿本」、巻子本・葦手本等を「再稿本」、乙類の粘葉本・伊予切・近衛本・法輪寺切を「精撰本」と位置付けた。

確かに堀部氏⑴・久曽神氏乙類の四本の関係は近い。また堀部氏⑵・久曽神氏甲類のうち、雲紙本と関戸本との関係、及び巻子本と葦手本との関係も近い。しかしながら「初稿本」、「再稿本」、「精撰本」という伝本の成立過程の捉え方については首肯し難い。

そこでまず、11 世紀中葉の書写とされる雲紙本と関戸本との関係について検討を行った。両本の書写者が源兼行（生没年未詳）であることは定説である。しかし両本の書写時期については先学では見解が異なり、またその決定的とも言える根拠が見当たらない。よって書き振りに加え、用字についても考察を行った。その結果、①雲紙本の方が関戸本よりも前に書写された、②両本の書写年時の間隔はさほど離れていない、と推定した。また形態・本文・注記についても近い関係にあることを確認し、なおかつ両本間に見られる相違、その異同の誘因、及び両本の親本の姿に関する私見を述べた。

堀部・久曽神両氏は、両本間に見られる詩歌句数の相違（関戸本に無い五首、雲紙本に無い三十八首）について、「誤脱」、「脱漏」に因ると指摘した。この説に対して稿者はこれらは意図的に変えられたものであり、しかもその作業には書写者（源兼行）ではなく、当該作品の撰者である公任または公任に近い人物が関わった可能性があると推定した。

次いで粘葉本と伊予切との関係について検討を行った。形態・本文、書の面において両本は極めて近い関係にある。書家であり書の研究者でもあった安東聖空氏は「同一人物が同一の和漢朗詠集を数多く書いた」と述べた。その所説について再検討を行いたく、書そのものに加え、書写された内容についても比較検討を行った。

その結果、両本の近似性は認めたものの、同筆と仮定すると矛盾する点も見出し、したがって両本は別人の手によると提言した。

ところで粘葉本と伊予切には、他の諸伝本中にはない両本にのみ見られる特異な本文が存する。稿者の提言（両本が別人の手による）が真であるならば、その特異な本文は書写者達の誤写の偶然の一致によるものではなく、両本の親本に起因する蓋然性が高いという点を付言した。

以上の考察結果を踏まえ、形態的な面を中心に雲紙本・関戸本と、粘葉本・伊予切との関係について再検討を行った。その結果、「雲紙本・関戸本に〈追補〉されたものが粘葉本・伊予切であり、〈初稿本〉から〈精撰本〉へと一元的成長を遂げた」という久曽神氏の所説を否定せざるを得ないと結論づけた。

また「再稿本」という捉え方についても整合しない点が明らかとなった。久曽神氏は巻子本・葦手本を雲紙本・関戸本と同じく甲類としたが、その位置付けは不明確である。堀部・久曽神両氏の分類の通り、形態面において巻子本・葦手本が雲紙本・関戸本の流れを汲むものであることに異論はない。しかし本研究において、両本の本文には、堀部氏⑴・久曽神氏乙類の四本（粘葉本・近衛本・法輪寺切・伊予切）と、堀部氏⑵・久曽神氏甲類のうちの二本（雲紙本・関戸本）との混在が確認された。またこのような雲紙本・粘葉本等の本文混在の様相は、巻子本・葦手本だけではなく、両本と同じく 12 世紀の書写と推定されている諸伝本についても指摘し得る特徴である。加えて 12 世紀書写本に特有かと思しき形態、本文等も確認された。したがって諸伝本の系統立てを試みる際、巻子本・葦手本を雲紙本・関戸本の類から切り放し、さらに 12 世紀の書写とされている諸伝本と同じカテゴリー内に収めるべきであると考えた。

既に書の研究者により、書風上の類似性の観点から諸伝本の分類はなされていたが、それは一部の伝本にとどまる。本研究により、内容面において新たにいくつかの伝本の関係性が明らかになり、それらは同じグループに属することが判明した。例えば 12 世紀書写本の主たるものには、巻子本・葦手本の他、伝公任筆唐紙切・安宅切・定信筆大字切・戊辰切が挙げられる。それらは代々能書を輩出した世尊寺家、あるいはその周辺の人々による書写かと思しき伝本であり、同一グループとするのが妥当であると判断した。

書の研究者による所説の中には、そのうちの伝公任筆唐紙切を藤原伊房（1030－1096）の真筆とし、戊辰切（巻下）を藤原定信（1088－1154 以後）の真筆とするものがある。ところが本研究を進める中で、書写内容・表記の面において当該説に整合しない点が見出された。伝公任筆唐紙切は 12 世紀の書写と推定する方が自然であり、また戊辰切（巻下）も藤原定信の時代よりも後に書写された可能性があるという点について指摘した。時代的特徴が表れる書写内容を無視して、書風のみで書写者等の推定を行うことは避けるべきである。その点に特に留意しつつ、書の研究を本文研究に並行して進めた。

以上の考察結果に基づき、集成し得た平安時代の書写とされる『和漢朗詠集』諸伝本のテキストデータ化を行った。さらに、取り上げた各伝本の書写内容の全てを検索し得る「『和漢朗詠集』語句検索システム」を構築した。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計7件（うち査読付論文　6件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　5件）

１．著者名 山本まり子	４．巻 12
２．論文標題 『和漢朗詠集』戊辰切の位置 －書写内容・書に関する考察－	５．発行年 2019年
３．雑誌名 大学書道研究	６．最初と最後の頁 29－40
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 山本まり子	４．巻 24
２．論文標題 『和漢朗詠集』データベースシステム構築を目指して	５．発行年 2019年
３．雑誌名 第24回公開シンポジウム「人文科学とデータベース」発表論文集	６．最初と最後の頁 73－80
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 山本まり子	４．巻 153
２．論文標題 『和漢朗詠集』伊予切の性格－粘葉本との関係を中心に－	５．発行年 2015年
３．雑誌名 語文	６．最初と最後の頁 １－17
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 山本まり子	４．巻 12
２．論文標題 『和漢朗詠集』伊予切「第一種」と粘葉本の書に関する一考察	５．発行年 2016年
３．雑誌名 お茶の水女子大学人文科学研究	６．最初と最後の頁 13－26
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 山本まり子	４．巻 13
２．論文標題 唐紙切『和漢朗詠集』の位置	５．発行年 2020年
３．雑誌名 大学書道研究	６．最初と最後の頁 29－37
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 山本まり子	４．巻 19
２．論文標題 『和漢朗詠集』情報開示に関する課題と私案	５．発行年 2019年
３．雑誌名 埼玉学園大学紀要　人間学部篇	６．最初と最後の頁 431－440
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 山本まり子	４．巻 30
２．論文標題 下絵切『和漢朗詠集』の位置	５．発行年 2020年
３．雑誌名 書学書道史研究	６．最初と最後の頁 －
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計1件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 山本まり子
２．発表標題 『和漢朗詠集』データベースシステム構築を目指して
３．学会等名 人文系データベース協議会
４．発表年 2019年

〔図書〕　計1件

１．著者名 山本まり子	４．発行年 2017年
２．出版社 お茶の水女子大学附属図書館（E-bookサービス）	５．総ページ数 361
３．書名 平安時代書写 和漢朗詠集 諸伝本の研究	

〔産業財産権〕

〔その他〕

―

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考